

## 六ツ美南部の歴史を彩った人々

氏名	生存年	備考
占部日良麻呂	0807～0881	占部の語源、三河権介
天祐竜山	1370～1487	崇福寺
松平好景	1517～1561	中島城、善明堤の戦い
板倉好重	1520～1561	中島城、善明堤の戦い
板倉勝重	1545～1624	板倉好重の子供、長圓寺再興
石川康正	1500～没年不詳	三河一向一揆
石川数正	1533～1593	徳川家康の片腕、
渡邊高綱	1521～1564	占部城、三河一向一揆
渡邊守綱	1542～1620	占部城、三河一向一揆
村越直吉	1562～1614	徳川家康、専念寺、西尾市上羽角町出身

### [占部日良麻呂 (807～881)]

占部平麻呂（うらべ ひらまる）は平安時代前期の貴族。名は日良麿とも記される。ト部氏（伊豆ト部氏）の祖で、子供に豊宗がいる。官位は従五位下・丹波介。

平麻呂は伊豆国の出身とされるが、その出自は明らかではない。大中臣清麻呂の孫にあたる智治麻呂の子とする系図もあるが、宿禰姓の平麻呂が朝臣姓の大中臣氏の後裔であることは考えにくいことから、後世の仮冒とされる。ほかに、中臣氏族とし、ト部嶋足あるいはト部宮守の子とする系図もある。

幼い頃から亀ト（亀甲を焼くことで現れる亀裂の形により吉凶を占うこと）を習得した。神祇官のト部となり、亀トにより義疑を決するにあたって能力を発揮したという。ト術（占い）に優れていたことから、838（承和5）年の遣唐使に加わり入唐する。翌年帰国した後、神祇大史・神祇少佑を経て、857（斉衡4）年に外従五位下に叙せられる。

858（天安2）年、神祇権大佑に任ぜられ宮主を兼ね、866（貞観8）年に三河権介を経て、868（貞観10）年に従五位下に叙位。こののち、備後介・丹波介と地方官を歴任した。881（元慶5）年12月5日死去。享年75。最終官位は従五位下行丹波介。

### [天祐竜山 (1370～1487)]

天祐竜山（てんゆう りゅうざん）は1370（応安3）年に赤松師範の8男として播磨国白旗城に生まれる。2歳で父を失って叔父範貞に養われ、8歳で五箇荘滝口法福寺毫空について得度。その後上洛して円福寺5世堯慧に師事し、聡明で有名となった。1406（応永13）年法福寺に帰り約40年間住持であったが、1441の嘉吉の乱で赤松氏が滅亡すると三河に来住し、占部変相寺に寓居した。これを知った中島城主由良光家は天台宗昌泰寺を改宗させて崇福寺とし、天祐を開山としたといわれている。崇福寺は常に学徒300を擁する学場となり、末寺は70をこえたという。1487（長享元）年11月11日、118歳で没した。

### [松平好景 (1517～1561)]

松平好景（まつだいら よしかげ）は、戦国時代の武将。松平忠定の子で、深溝城主。又八郎、大炊助と称す。子に長篠の戦いで武田信実を討った松平伊忠がいる。松平忠定を祖とする深溝松平家の2代目である。善明堤の戦いで敵を深追いし、敵方の伏兵に包囲され討死した。彼の首は向野首塚に埋められている。なお、没年については弘治2年（1556年）説もある。



松平好景の碑案内 1922(大正11)年建立 20150818



松平好景の碑 1872(明治5)年建立 20150818

下永良陣屋跡：西尾市下永良町鎮守20

### [板倉好重 (1520～1561) ]

板倉氏は、足利宮内少輔泰氏の次男、義頭を祖とする。義頭ははじめ板倉二郎、のち渋川とあらため、満頼や義俊の代には九州探題職をつとめた。三河の板倉氏は、義鏡の子孫で三河に流れた板倉頼重が祖とされ、三河国額田郡小美村に住み、頼重・好重父子は深溝松平氏に仕えた。板倉好重（いたくら よししげ）は板倉頼重の長男で八右衛門という。1561年（永禄4）年に、松平好景の子、伊忠は上野城救援を命じられた。そのため、伊忠の守っていた中島城が手薄になり、それを知った吉良義昭は中島城攻めを開始した。松平好景は深溝城から中島城救援に出陣。松平好景、板倉好重は吉良勢との合戦（善明提の戦い）で討死した。享年42歳、子供は忠重、勝重、定重の3人である。

板倉家の家系図：頼重—好重—勝重—重宗—重郷



板倉好重戦死の碑  
20150731



### [板倉勝重 (1545～1624) ]

板倉勝重（いたくら かつしげ）は、安土桃山時代から江戸時代前期の旗本、大名である。江戸町奉行、京都所司代などを歴任した。板倉家宗家初代である。史料では官位を冠した板倉伊賀守の名で多く残っている。優れた手腕と柔軟な判断で多くの事件、訴訟を裁定し、敗訴した者すら納得させるほどの理に適った裁きで名奉行と言えれば誰もが勝重を連想した。勝重は好重の次男として三河国額田郡小美村（現在の愛知県岡崎市小美町）に生まれる。幼少時に出家して浄土真宗の永安寺の僧となった。ところが、1561（永禄4）年に父の好重が深溝松平家の松平好景に仕えて「善明提の戦い」で戦死し、さらに家督を継いだ弟の定重も1581（天正9）年に「高天神城の戦い」で戦死したため、徳川家康の命で家督を相続した。



その後は主に施政面に従事し、1586（天正14）年には家康が浜松より駿府へ移った際には駿府町奉行、1590年に家康が関東へ移封されると、武蔵国新座郡・豊島郡で1000石を給されて、関東代官、江戸町奉行となる。関ヶ原の戦い後の1601（慶長6）年、三河国3郡に6600石を与えられるとともに京都町奉行（後の京都所司代）に任命され、京都の治安維持と朝廷の掌握、さらに大坂城の豊臣家の監視に当たった。なお、勝重が徳川家光の乳母を公募し春日局が公募に参加したという説がある。

1603（慶長8）年、家康が征夷大将軍に就任して江戸幕府を開いた際に従五位下・伊賀守に叙任され、1609年には近江・山城に領地を加増され1万6600石余を知行、大名に列している。同年の猪熊事件では京都所司代として後陽成天皇と家康の意見調整を図って処分を決め、朝廷統制を強化した。1614（慶長19）年からの大坂の陣の発端となった方広寺鐘銘事件では本多正純らと共に強硬策を上奏した。大坂の陣後に江戸幕府が禁中並公家諸法度を施行すると、朝廷がその実施を怠りなく行うよう指導と監視に当たった。1620（元和6）年長男の重宗に京都所司代の職を譲った。1624（寛永元）年に死去、享年79歳であった。

中島山長圓寺は勝重が1600年に永安寺を再興した寺である。長男の重宗は、1630（寛永7）年、勝重の七回忌に際し、万燈山麓（所在地：西尾市）に長圓寺を移し、新たに禅林風伽藍を完備し、山号を万燈山と改めた。本堂裏には板倉家の廟所があり、「肖影堂」（県指定文化財）と呼ぶ。方三間の宝形造り、濡縁を巡らした丹塗りの堂である。堂の扁額の文字は、同じく家康に仕えた石川文山（いしかわじょうざん、安城和泉出身の漢学者）の書である。「肖影堂」一帯には板倉氏代々の大きな格式の高い墓石が林立している。また、勝重の次男重昌（しげまさ）は、島原の乱に出陣して戦死していることから「島原殉難諸士之墓」という石碑も建っている。板倉氏は歴代、京都所司代や老中など幕府の要職を務め、文化財も板倉氏ゆかりのものが多い。



板倉勝重



長圓寺 20150808



勝重廟 長圓寺 20150808



板倉家代々の墓 長圓寺 20150808

### 【石川康正（1500～没年不詳）】

石川康正（いしかわ やすまさ）の父は石川清兼で、石川康正は石川数正の父である。1563（永禄6）年、西三河を中心に三河一向一揆が発生し、一向宗を支持している徳川家臣の中には、家族が敵味方に分かれて戦う者も多かった。本宗寺（三河三ヶ寺）の門徒家臣の中でも大物で、三河の本願寺門徒の総代であった石川家も例外ではなく、当主の康正は岡崎城代を務めていたが、康正は三河一向一揆の大將分として家康に反抗、嫡子の数正（かずまさ）や、弟の家成（いえなり）

は浄土宗に改宗して家康に従った。渡辺守綱や本多正信といった多くの徳川家臣が味方した三河一向一揆衆であったが、やがて松平家康ら徳川方の奮戦や家康の機転もあり沈静化した。

石川家の家系図：正康—親康—忠輔—清兼—康正—数正—康長

### 〔石川数正（1533～1593）〕

石川数正（いしかわ かずまさ）は、戦国時代から安土桃山時代にかけての武将・大名である。酒井忠次と共に徳川家康の片腕として活躍したが、小牧・長久手の戦いの後に徳川家を出奔して豊臣秀吉に臣従した。信濃松本藩の初代藩主とすることが通説となっている。

1533（天文2年）、石川康正の子として三河国で生まれる。松平元康（家康）が駿河国の大名・今川義元の人質になっていた時代から近侍として仕え、1560（永禄3）年の桶狭間の戦いで義元が討たれて松平元康が独立すると、数正は今川氏真と交渉し、当時今川氏の人質であった元康の嫡男・信康と駿府に留め置かれていた元康の正室築山殿を取り戻した。1561（永禄4）年、元康が織田信長と石ヶ瀬で紛争を起こした際には、先鋒を務めて活躍した。

1562（永禄5）年、織田信長と交渉を行ない、清洲同盟成立に大きく貢献した。1563（永禄6）年、三河一向一揆が起こると、父・康正は元康を裏切ったとみられるが、数正は浄土宗に改宗して元康に尽くした。しかし石川宗家の家督は叔父の石川家成が元康の命で継いだ。これは家成が元康の従兄妹にあたるためでもある。しかし、数正は元康に近習していたこともあり、戦後に元康から家老に任じられ、酒井忠次、石川家成らに次いで重用されるようになった。信康が元服するとその後見人となった。1569（永禄12）年には、西三河の旗頭であった叔父の家成が遠州東部の要である掛川に転出すると、代わって西三河の旗頭となった。

また、軍事面においても1570（元亀元）年の「姉川の戦い」、1572（元亀3）年の「三方ヶ原の戦い」、1575（天正3）年の「長篠の戦い」など、多くの合戦に出陣して数々の武功を挙げた。1579（天正7）年に信康が切腹すると、岡崎城代となる。

1582（天正10）年に織田信長が死去し、その後に信長の重臣であった羽柴（豊臣）秀吉が台頭すると、数正は元康の命令で秀吉との交渉を担当した。このため1584（天正12）年の「小牧・長久手の戦い」にも参加した。この戦いにおいて元康に秀吉との和睦を提言したと伝えられる（この説は後に数正が秀吉方に与したという結果論から作られた説とも言われている）。

ところが、1585（天正13）年11月、突如として元康のもとから出奔し、秀吉のもとへ逃亡した。理由は謎であり、「元康と不仲になった」「秀吉から提案された条件に目が眩んだ」など諸説入り乱れているが、今でもはっきりした理由は分かっていない。数正は徳川の軍事的機密を知り尽くしており、この出奔は徳川にとって大きな衝撃であった。以後、徳川軍は三河以来の軍制を武田流に改めることになった。この改革に尽力したのが、織田・徳川連合軍によって武田家が滅亡した際に、元康が信長による武田の残党狩りから匿った武田の遺臣達である。

その後、数正は秀吉から河内国内で8万石を与えられ、秀吉の家臣として仕えた。この時、出雲守吉輝と改名したとも伝わる。1590（天正18）年の小田原征伐で後北条氏が滅亡し、元康（家康）が関東に移ると、秀吉より信濃松本（領地は筑摩郡と安曇郡）10万石に加増移封された。数正は松本に権威と実戦に備えた雄大な松本城の築城と、街道につないで流通機構のルートを掌握するための城下町の建設、天守閣の造営など政治基盤の整備に尽力した。1593（文禄2）年、死去。享年61。しかし没年には異説もある。

### 〔渡邊高綱（1521～1564）〕

渡邊高綱（わたなべ たかつな）は戦国時代の武将。通称は源五左衛門である。松平広忠、徳川家康につかえ、広忠の三河上野城攻めに戦功があった。1563（永禄6）年、三河一向一揆の蜂起の際、一族をあげて額田郡針崎の勝鬘（しょうまん）寺に拠って家康に反抗し、翌年1月11日針崎で討ち死にした。享年44歳。高綱の子に守綱がいる。高綱の墓は勝鬘寺に祭られている。

渡邊家は江戸時代の末まで占部に住んでいたが、両親を亡くした一人娘が行方不明になり家系は途絶えた。

渡邊家の家系図：範綱—氏綱—高綱—守綱—重綱—綱貞





勝鬘寺 20150818

勝鬘寺：岡崎市針崎町朱印地3



渡邊高綱の墓  
20150818

### 【渡邊守綱（1542～1620）】

渡邊守綱（わたなべ もりつな）は、戦国時代から江戸時代前期にかけての武将である。江戸幕府の旗本で、通称は半蔵、忠右衛門という。徳川氏の家臣で三河国額田郡浦部村（現在の岡崎市国正町）の出身である。三河寺部城主の渡邊高綱の子である。渡邊守綱の子に重綱、宗綱、成綱がいる。弟は渡邊半十郎（後、新左衛門）政綱である。

三河の渡邊氏は、松平氏の譜代家臣で、平安時代の嵯峨源氏の武将渡邊綱の後裔を称し、系譜の上では、渡邊綱の孫で肥前松浦氏の祖になる松浦久の孫の渡邊安の後裔と伝えられる。守綱は、若い頃から同年生まれの松平元康（のちの徳川家康）に仕えた。槍が得意であり、1562年の三河国八幡の合戦で今川氏家臣・板倉重貞に敗れた際、後尾にあつて奮戦して以来「槍半蔵」と呼ばれ、「鬼半蔵」の服部正成と並び称された。しかし、熱心な一向宗（本願寺）の門徒だったので、1563（永禄6）年に勃発した三河一向一揆において他の門徒家臣と同じく家康に背き、一向一揆に加わった。一揆が家康によって破られると反逆を許され帰参し、以後は家康の主要な戦いの大半に参加した。姉川の戦いでは、旗本一番槍をあげるなどの戦功を重ね、旗本足軽頭として出陣した三方ヶ原の戦い、長篠の戦い、小牧・長久手の戦いでは先鋒を務めた。なお、長篠の戦いでは山本勘助の嫡子山本勘蔵を討ち取った。

1590（天正18）年、徳川氏が三河から関東地方に移封されると、武蔵国比企郡に3000石を与えられた。関ヶ原の戦いのあった1600（慶長5）年には長年の功績を賞せられて1000石を加増、騎馬同心30人の給分6000石を付属させられ、足軽100人の組頭となった。

1613（慶長13）年、家康の直命によって尾張藩の藩主に封ぜられた家康の9男徳川義直の付家老に転じ、武蔵国の4000石に加えて尾張国の岩作（愛知県長久手市岩作）で尾張藩より5000石、三河国寺部（豊田市寺部町）で幕府より5000石を与えられ、あわせて1万4000石を領して寺部城に居城した。1614（慶長19）年の大坂冬の陣、1615（慶長20）年の大坂夏の陣に出陣して藩主義直の初陣を後見、1616（元和2）年の家康死後、領国尾張に入った義直を直に補佐し、1620（元和6）年に名古屋で死去した。享年79。墓所は愛知県名古屋市の興善寺および豊田市の守綱寺。のちに、その功績から家康配下の徳川十六神将の一人として顕彰された。その子孫は寺部に1万石を領して尾張藩家老として続き、分家は和泉国伯太藩（大阪府和泉市）で1万3000石の大名となった。



渡邊守綱

### [村越直吉 (1562~1614) ]

村越直吉(むらこし なおよし)は、安土桃山時代の武将で徳川家の家臣。通称は茂助(もすけ)といい、1562(永禄5)年に上羽角村(現在の西尾市上羽角町)に生まれる。3歳で父(村越俊吉)を亡くし、叔父の俊信に育てられた。徳川家康に仕え(老中まで務めた)、駿河葛谷に300石を与えられた。後に剛勇ぶりが認められて松平信孝が去った三木城〔岡崎市三ツ木町〕へ入った。1590年家康が関東へ移ると、近江国坂田と武蔵国の入間・多摩3郡内で1000石を受け、後に1万石の領主になる。1600(慶長5)年の関ヶ原の戦いでは東軍の将、福島正則・黒田長政・池田輝政・藤堂高虎らとの間の連絡を務め、岐阜城攻略の命を伝達した。また、1613(慶長18)年、安藤重信と池田利隆の領地である播磨国姫路に赴き、国政を監督するなど、家康の側近として活躍した。1614(慶長19)年1月15日に死去。享年53。その墓と伝えられているものが専念寺と三ノ山(上羽角)共同墓地にあると言われている。専念寺の墓は宝鏡印塔の笠の部分と五重塔の一部を組み合わせた塔で、室町時代のもと言われている。専念寺は、愛知県西尾市上羽角町にある真宗大谷派の寺院。専念寺の楠は西尾市内では最大と見られ、市の天然記念物に指定されている。



専念寺山門 20161013



専念寺本堂 20161013



専念寺 村越の墓 20161013



共同墓地 村越の墓